

『主を待ち望む人でありたい』 ルカ2:25-32 36-38

2:25 その時、エルサレムにシメオンという名の人がいた。この人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。また聖霊が彼に宿っていた。

2:26 そして主のつかわす救主に会うまでは死ぬことはないと、聖霊の示しを受けていた。

2:27 この人が御霊に感じて宮にはいった。すると律法に定めてあることを行うため、両親もその子イエスを連れてはいってきたので、

2:28 シメオンは幼な子を腕に抱き、神をほめたたえて言った、

2:29 「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりに／この僕を安らかに去らせてくださいます、

2:30 わたしの目が今あなたの救を見たのですから。

2:31 この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、

2:32 異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」。

2:36 また、アセル族のパヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。彼女は非常に年をとっていた。むすめ時代にとついで、七年間だけ夫と共に住み、

2:37 その後やもめぐらしをし、八十四歳になっていた。そして宮を離れずに夜も昼も断食と祈とをもって神に仕えていた。

2:38 この老女も、ちょうどそのとき近寄ってきて、神に感謝をささげ、そしてこの幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りきかせた。

●主題

- I. 約束にふさわしい
- II. 教会にふさわしい
- III. 来るべき日にふさわしい

●序論

「主を待ち望む」ことは、聖書全巻を通して、重要なテーマであり、チャレンジです。

「待つ」というだけなら だれだってできる、と思われがちです。しかし、待っているということを好きですか?と言われて「好き」と言えるかどうか…と言うとどうでしょう。

皆さんは今、何かを待ち望んでおられるでしょうか? また、あなたにとって何を待ち望む経験が大切でしょうか?

●本論

- I. それは、約束にふさわしい

今日聖書に語られている「待ち望んでいた人」というのは、すなわち神さまからの約束の言葉に生きていた人たちでした。聖書を通して語られる、いすれ「救い主」が現れるという約束を心から待ち続けていた人たちでした。

:25 その時、エルサレムにシメオンという名の人がいた。この人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。

また、36節以下で紹介されるアンナという女預言者も待ち望む人でありました。

すなわち彼らは、「主の約束の実現を待ち望む人たちの代表」として描かれています。彼らは、共通して年老いていました。

その高齢に至ってもなお、主の約束の言葉を捨てず、あきらめず、むしろ期待とわくわくした思いをもって、約束の成就を待ち望んでいた人たちだったのです。

さて、現代社会では、約束を信じて待つということは少なくなったのではないかと思うことがあるでしょう。

待ち望むという、神さまに時間をかけるような”忍耐”を苦手とする姿があります。

真剣に神さまの御手による導きと、語りかけと御業を待ち望んで、その待ち望む者としてふさわしい生活を選ぶ経験というものが少なくなっているかもしれません。

このシメオンとアンナという二人の人…。

その幸せと喜びは、自分たちの野望や理想から生みだしたものではありませんでした。彼らの人生は、神さまと共に歩むことでした。そして圧倒的に多くの時間は、この神の約束の成就を「待ち望む」ことに捧げられました。

でもこの一事のゆえに、かけがえのない喜びを得ることができたのです。

それぞれが不思議な神の物語に織り込まれ、すべて結び合わされています。

「主が、わたしに心をかけてくださった」と。まさに一人一人がそういう経験をして、そして神さまのご計画の中に織り込まれていたのです。

それに気づくかどうかは大切です。今のわたしたちもまた、自分に心をかけくださっている方と共に歩む者とされ、神さまの喜びの物語に織り込まれているからです。

Ⅱ. それは教会にふさわしい

待ち望んでいたからこそ、赤ちゃんとしてお生まれくださった救い主に「気づくことができた人たち」の姿がそこにあります。

そこにある多くの赤ん坊の中がいた。しかし、シメオンは気づいたのです。

聖書は彼のことを、「聖霊が彼に宿っていた」「聖霊の示しを受けていた」「御霊に感じて宮に入ってきた」としるし、彼の心と人生の標準として、聖霊の導きがあり、彼は従う人であったと語ります。

はっきり申し上げます。年齢ではなく聖霊です。経験ではなく聖霊です。知識や権力ではなく聖霊によって、彼は気づきを得たのです。

2:27-28 この人が御靈に感じて宮にはいった。すると律法に定めてあることを行うため、両親もその子イエスを連れてはいってきたので、シメオンは幼な子を腕に抱き、神をほめたたえて言った、

はたから見るならば、不思議だったでしょう。彼は言いました。

2:29-30 「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりに この僕を安らかに去させてください、わたしの目が今あなたの救を見たのですから。…」

いきなり知らない赤ん坊を抱きつつ、「わたしの目が今あなたの救いを見た」とはっきりといえるほどの確信を得た。そこに聖靈による気づきと感動があったのです。

これはまた教会の姿です。聖靈の感動が、一人一人に与えられ、主の御言葉と御業への気づきが与えられる…。そういうすがたです。

さらにアンナという女性は、幼な子イエス様を見て、神さまの約束の実現を知ることができました。

2:38 この老女も、ちょうどそのとき近寄ってきて、神に感謝をささげ、そしてこの幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りきかせた。

彼女もまた気づきを得た一人となったのです。

そして喜び、やはり「エルサレムの救いを待ち望んでいる人々」つまり救い主を待ち望んでいた人たちに語り伝えていったことが記されています。

経験した喜びを、友人たちに伝えるそれは、教会の姿に重なるのです。

聖靈の感動を受けて、主を待ち望む人々の群れと教会は「気づきを経験する」。それがどれだけ幸いな喜びとなるか。

III. 来るべき日にふさわしい

アンナは、「エルサレムの救いを待ち望むすべての」人々を知っていたようです。

アンナはさっそく目にした幼子のことをその人たちにお話していました。

ここには、”名もなき” 信仰者たち。主を待ち望む人たちの存在に触れています。その存在も取り上げている。私たちが模範とすべき信仰者たちがいるからです。

現代の私たちもまた、その一人となるべく歩んでいるのです。

今、「主を待ち望む」というとき、わたしたちはイエス・キリストが約束された「再臨」を待ち望むことを表しています。

アドベントとして、主を待ち望むことを語るとき、キリスト教では、主イエス・キリストが再び天より来られる再臨の日を待ち望むことを、もともとは示していたのです。

その日は私たちにとっては、すばらしい救いの完成の日であり、また主のもとに引き上げられる時であると語られる大切な日であるからです。

主を待ち望むと表現するにふさわしい日です。

そういう意味で、かつて、救い主の誕生を待ち望んだ人の気持ちを追体験するのです。

あのシメオンやアンナのような、信仰のありさまをもって、主の約束を、真摯に受けとめ、不思議に思うことがあっても、必ず実現するのだと信じて、期待とワクワク感をもって、心から待ち望む教会とされてているのです。

●最後に

聖書が、シメオンそしてアンナ、また救いを待ち望む人たちの姿を、わざわざ語っているのは、わたしたち小さな信仰者への励ましてあると覚えてもらいたいのです。ルカはあえてそこにシメオンをアンナのことについて語りました。待ち望む人々のことについて触れました。…そこにわたしたちへのメッセージがあります。

それは、主を待ち望む信仰者たちがいたこと。そして彼らの誠実な信仰生活、そして敬虔な信仰こそが、多くの人が見逃していた「救い」を見る力となっていたのだということを、私たちに示しているのです。

今日、私たちはこの人たちに模範を見、主にあって「約束された主の再臨を待ち望むもの」、その約束のゆえに「救いを見るもの」「その恵みの深みを知る者」として生かされているのです。 そういう生きざまを聖書はこう語ります。

テトス2:11-13

実に、すべての人々に救いをもたらす神の恵み（イエス・キリストによる救い）が現れました。その恵みは、わたしたちが不信心と現世的な欲望を捨てて、この世で、思慮深く、正しく、信心深く生活するように教え、また、祝福に満ちた希望、すなわち偉大なる神であり、わたしたちの救い主であるイエス・キリストの栄光の現れを待ち望むように教えています。

私たちはすでに現された神の恵みによって、神の子とされています。

ただ、私たちは、名も知られないようなキリスト者だろうと思います。それでも、その信仰と敬虔さ、誠実さに、主を待ち望むことの幸い、幸せを知る者として歩むことができれば、感謝です。

だれよりも、神さまが、そんなわたしたちに目を留め、「心にかけてくださっている」ことを、わたしたちは知っているからです。